

建設経済常任委員会  
所管事務調査報告書

栃木県藤原町  
「観光業の振興策」について

藤原町は人口約一万二千人で、鬼怒川温泉と川治温泉が有名です。観光業が基幹産業で、住民の約八四割がサービス業に従事しています。宿泊施設は約五〇軒、一日あたり約二万四千人の収容力があり、宿泊客は平成五年の三四一万人をピークに、平成十五年には二三八万人にまで減少してきている。観光業低迷の要因は、これまでバブル期の過剰な設備投資、さらには景気低迷などによるものが主で、町ではこの打開策として、地域経済の活性化や地域雇用の創造の実現を目的として、「地域再生計画」を策定し国の認定を受けた。再生の方向性として、

地理的特性を生かしつつ、新しい観光と産業を主軸として、福祉観光をテーマに訪れる人たちに、人間性回復の場として、心と体のやすらぎの場の提供をめざしている。これからの方向性として、ハード事業よりもソフト面を重要視し、「おもてなしの心」などを基本とした「あいさつ運動」を強力的に推進していきたいとのことである。従来の温泉観光型から、福祉を中心とした「もてなしの心」を大事にした観光への切り替えがポイントである。また、町長や議長、そして、町職員等も、観光宣伝マンとして、積極的な活動がなされている。



ヤーコン栽培の現地調査（塩谷町）

栃木県塩谷町  
「農林業の振興策」について

塩谷町は、人口約一万四千人で、東京まで二二〇キロ圏内という地理的条件を生かして、水稲を主体にトマト・キク・ナシ等の施設園芸や果樹栽

培が盛んである。塩谷町では、水田転作物として、大豆・麦を推進しているが、生産面や販売面が不安定なことから、新しい品目として、

南米ペルー産のキク科の「ヤーコン」を平成九年から導入し、現在では約四割が栽培されている。同町では、「ヤーコン」を使った地ビールの開発に取り組みとともに、「ヤーコン」を使ったいろいろな料理の開発も行っている。「ヤーコン」は、健康食品として注目されており、人気も高い。同町では、今後さらに、「ヤーコン」の販路の確立を図るとともに、おいしく、また楽しく食べるためのソフト面での推進も図っていきたいとのことである。

本町においても、「ヤーコン」を水田転作物として推進し、農家の所得向上につなげられないか。また、「ヤーコン」を使った新しい特産品の開発等を進められないのか。建設経済委員会として、これら二点について、検討を進めてもらいたいとの意見集約をした。